死の彼方(かなた)まで　三浦綾子

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども、お書きそえくだされば、幸せこ存じます。

東京都文京区音羽二丁目六番一二号
（郵便番号一一二）
光文社 出版局書籍

死の彼方までも

昭和48年12月15日　初版発行
昭和49年1月31日　7版発行

著者　三浦綾子
北海道旭川市豊岡二条4丁目

発行者　五十嵐勝彌

印刷者　萩原崇男
東京都文京区後楽2—21—12
萩原印刷

発行所　東京都文京区音羽2　株式会社　光文社
振替東京115347　電話　東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　(複本製本)

© Ayako Miura 1973

(分)0-0-93(製)92005(出)2271 (0)

死の彼方(かなた)までも

三浦(みうら)綾子(あやこ)

KOBUNSHA

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

死の彼方(かなた)まで　5
赤い帽子　79
足跡(あしあと)の消えた女　111
逃亡　179

カバー絵・本文カット　中西清治（なかにしせいじ）

デザイン　伊藤憲治（いとうけんじ）

死の彼方(かなた)までも

一

さっきから、雨がテラスのコンクリートに跳ね返って、白くしぶいている。大きな庭石のそばに紫のエゾつつじが無残に雨に打たれている。いまにも花びらが落ちるかと思うほどに、つつじは右に左に揺れながら、ただ素直に、雨に打たれているだけだ。

順子はそれを見ながら、昼食の用意をしていた。

「雨はまだやまないのでしょうか」

順子は、夫の俊之に語りかけるともなく、呟いた。ふっくらとした白い頬と、微笑をたたえている口もとがやさしい。

俊之は、ソファにねころんで新聞を見ながら、

「うん」

と生返事をした。

「雨はやみませんよ、ママ」

人形と遊んでいた五つの七重が、こましゃくれた口調で、きめつけるように言った。少し受け口だが、パッチリとした目が、黒々として、どこか人を魅きつける。その七重の顔を見ながら、順子は、七重を生んだ利加という女を、ふと想像した。

「いや、通り雨だろう。旭川地方はくもり後晴れとなってるよ。もうやむさ」
朝刊を四つ折りにして、むっくりと俊之は起き上がった。たもとからタバコを取り出そうとした俊之の傍らに、飛んで来た七重が言った。
「やみませんよ、パパ」
七重は怒ったように言う。
「ああ、そうか。せっかくの日曜なのに、雨はやまないのか」
俊之は、いかにもかわいいというように、七重を抱きあげて、頬ずりした。
「いや、パパ。あたし、おひげ痛いのきらいよ」
食卓に皿を並べながら見ていた順子が、ふっと視線を外らした。今日はなぜか、七重の上に、まだ見たことのない、その母の利加の顔がだぶって映る。夫の俊之が、七重に頬ずりしているのが、利加に頬ずりしているような感じで、順子は妙に耐えられない思いがした。
「じゃ、めしにしようか。ほう、ニシンの塩焼きか、珍しいね」
俊之は、七重とともに食卓についた。
「あたし、ニシンきらい」
七重は、反抗するように言って、馬鈴薯のみそ汁をひと口すすった。
「なんだパパ、おさかな食べるのへたね。あたしとってあげる」
七重は、子供とは思えない器用な箸の使い方をする。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「そうかそうか、それじゃ七重にとってもらおうか」
俊之は相好を崩した。
順子が西条俊之と結婚したのは、三年前の五月だった。あと、半月ほどで結婚記念日が来る。順子が二十二歳、俊之が三十二歳だった。順子が俊之を知ったのは、その前の年の暮れだった。俊之はS銀行の当座預金の窓口にいた。順子はS銀行の近くの薬局に勤めていて、毎日のように銀行に行っていた。
その年最後の土曜日で、銀行は朝から混雑していた。店主の使いで順子は三万円を両替に、銀行に行った。両替は当座預金の窓口で扱っていた。確か一万円札を三枚持って行ったはずなのに、店主に渡そうとして数えてみたら、五万円ある。驚いた順子は、すぐに戻しに行こうとした。店主や同僚たちは、
「よしなよ、順ちゃん、二万ぐらいもらっておいたって、銀行は痛くもかゆくもないよ」
と言った。
「まさか、そんなこと」
順子は一円でもごまかせない性分である。早速二万円を持って、銀行にとってかえした。俊之は驚き、顔を赤らめながら礼を言った。
「そうでしたか。申し訳ありません」
幾度も俊之は頭を下げて、ていねいに礼を言った。

あとで聞いたことだが、その朝、利加と同じ苗字の新田という女性が当座預金に金を預けに来たため、俊之は利加のことを思い、忙しいはずなのに、ぼんやりしていたというのである。

「順ちゃん、お客さんよ」

奥の間で食事をとっていた順子が呼ばれて店に出て行ったのは正月二日売り初めの日だった。客の賑わう店の中に、茶色のオーバーを着た西条俊之が、はにかんで立っていた。

「いらっしゃいませ」

順子は少し驚いて、なんの用事かと近づいて行った。俊之はちょっと目を伏せたが、すぐにオーバーのポケットから、青いリボンのかかった小さな紙包みを出した。

「これ、ほんの、ぼくの気持ちです」

「なんでしょう？　わたくし頂く筋合はございません」

「いいんです、いいんです」

俊之は逃れるように、ドアを押して出て行った。小さく揺れるドアの向こうに、凍った舗道を急いで去っていく俊之の姿を見ながら、順子は再び奥の間に戻った。包みを傍らにおいて食事をつづけたが落ちつかない。たぶん、あの両替のときの礼だろうとは思いながら、当たり前のことをして礼を受けるのは、気になった。だが思い切って包みをあけて見た。中には真珠が一つついている銀のブローチが、思いがけなく手紙とともにはいっていた。

「早く御礼をと思いながら、いつの間にか年があらたまりました。あなたが二万円多かったとお

っしゃって、お金を返しに来てくださったとき、ぼくはなんとも言いようのない驚きでいっぱいでした。それは、自身がうかつであったという驚きや、あなたが正直な方だったという驚きだけではありません。無論ぼくは、あなたが、両替のお金をすぐお返しくださったことを、現代では、まれにみる正直な方と、思わずにはいられませんでした。

しかしぼくが驚いたのは、あなたがなんの気負いもなく、淡々として返してくださったときの、あの澄んだまなざしに驚いたのです。ぼくは恥ずかしい話ですが、人間という者を、特に女性を信じない男になっていたのです。それがなぜであるかは、いまここに語る勇気はありません。

ぼくはあの日、あなたによって、実に大きなものを与えられたのです。あの日あなたがお金を返してくださらなかったら、二万円はぼくが弁償ということになったでしょう。それは確かに小さな金額ではありませんから、やはり痛手になったことはまちがいありません。しかしあの日、深い人間不信におちいっていた自分に、あらためて気づかされたことだけでも、あなたがぼくに与えてくれたものは、計り知れなく大きいのです。どんなに感謝しているか、おそらくあなたにはわかってもらえないでしょう。

その感謝の気持ちをあらわすのには、貧弱過ぎますが、今年初めてのぼくの買物です。ぼくの気持ちを受けとってくだされば、うれしく思います。

西条俊之

三国順子様」

順子は、俊之の姓が、西条であることだけは、胸につけた名札で知っていた。だが自分の名前を、どうして知ったのだろうと、ふしぎだった。

再び手紙を読み返し、順子はブローチとともに大事にハンドバッグにしまった。人間不信におちいっていたというその手紙が、順子の心を強くとらえた。

（あの人は独身なのだろうか。奥さんがいるのだろうか）

店に出てからも、俊之のことが気になってならなかった。その、どこか淋しげだが、落ちついた風貌が、妻帯者のようにも思われる。未婚者であろうと既婚者であろうと、自分には関係のないことであると思いながら、順子はほのぼのと楽しかった。

二人が結婚したのは、その年の五月二十七日だった。

俊之と順子と七重の昼の食事が終わりかけたときだった。突然電話のベルが鳴った。順子はすぐそばの飾り棚にある受話器を取った。

「西条でございます」

雨がやんだと思いながら、順子は庭のつつじに目をやった。

「もしもし西条さんですか。あなた、だあれ？　奥さん？」

何か粘りつくようなアルトだった。順子はふいに胸さわぎがした。

「あの、どちらさまでございましょうか」

相手は低く笑った。順子は俊之の顔を見た。
「もしもし」
順子が促すと、相手は笑うのをやめて、
「わたし？　わたし利加よ」
「え？」
順子は、ハッと顔色を変えた。
「もしもし、利加って女のこと、俊之から聞かなかった？　ま、それはいいわ。俊之を出してくださらない」
高飛車な口調だった。
「あなた、お電話です」
順子は思わず俊之を咎めるような声になった。
「どこからだ」
「利加さんという方です」
「利加から？」
ソファから立ち上がった俊之は、さっと顔をこわばらせた。
「いないと言いなさい」
「だって……」

受話器から利加の声が聞こえてきた。
「もしもし、俊之はいるんでしょう。利加って聞いて、出たくないって言ってるんでしょう。いいわ、出なくても。でも、こう言ってちょうだい。わたし、道立病院の五階に入院してるの。癌ですって。あと、半年持つかどうかだと思うの。ひと目会って、お詫びしたかったって、おっしゃって」
「あ、もしもし、ちょっとお待ちください。……あなた」
順子は、受話器を手でふさぎ、聞き耳を立てている俊之に言った。
「あなた、大変よ、癌ですって。道立病院に入院しているんですって。あと半年持つかどうかと、おっしゃってますわ」
「癌？　自業自得だよ」
「あなた、そんな。ひと目会ってお詫びしたいんですって」
順子は低く言った。
「ふん、いまさら詫びられたって……馬鹿にしてる」
俊之はソファに腰をおろした。
「困るわ、わたし」
「そのまま切りなさい。あんなやつに用事はない」
「そんなことおっしゃったって……もしもし、あのお……西条は」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.